

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第20巻 第1号



御 前 峰

普通、「ごぜんがみね」と呼びます。標高は2,702mで、白山では最も高い峰です。御前峰・剣ヶ峰・大汝峰の三峰が、白山の頂上部を構成します。御前峰は剣ヶ峰と共に新白山火山の噴出物からなり、その稜線は北西～南東方向に伸びています。左の頂が御前峰のピークで、手前右の高まりが御宝庫と呼ばれているものです。この細長く伸びた稜線は、約4,500年前に起きた、山頂部の大崩壊によってできたもので、一種の滑落崖と考えてよいでしょう。大白川には、この時の崩壊によって流出した堆積物が残されています。

—白山蛇谷の自然誌—

ニホンザルのフンコロジー

林 哲

白山ジライ谷の景観(カムリA・C群の行動圏となっている。平成4. 5. 30)

ニホンザルのフンウォッチング

ハイキングや山菜採りに出かけた時、道端のテンやイタチのフンを見かけた人はかなり多いと思います。林の中では丸い形をしたノウサギのフンもかなり見られます。フンと言えば、汚いもの、嫌なものの代名詞みたいに思っている方が多いと思いますが、動物を調べるときには大切な「情報源」になります。

動物のフンは、私たちにいろいろなことを教えてくれます。一つは、そのフンによって(フンの落とし主を知ることによって)そこに、どういう動物がいたかを知ることができます。二つは、フンの新旧の程度によって、その動物がいつ頃そこにいたかが分かります。三つは、フンをよく見る(調べる)ことによって、その動物が何を食べていたかを知ることができるのです。私は、1991年の秋(9月~11月)、白山蛇谷の支流のジライ谷にある餌場に出てくるカムリA群と名付けられたニホンザルのフンを110個(1日に10個)採集して整理してみました。

フンはできるだけ大きく、新鮮なものを収集し、これを1個ずつ水洗いして中に入っている固形物だけ取り出して分析することにしました。その結果を以下に報告したいと思います。

110個のフンの中に21,255個の「種子」

(1) ブドウ類とマタタビ類種子

110個のフンの中には、植物の葉、茎の断片と種子が多く見られました（総数21,255個）。このうち、ヤマブドウ、サンカクズルなどのブドウ類とマタタビ、ミヤママタタビ、サルナシなどのマタタビ類の種子が特によく見られ、12,762個（種子総数の約60%）数えることができました。ヤマブドウやマタタビ、サルナシなどの果実をニホンザルがよく食べているのは、志賀高原の地獄谷や表日光の調査で明らかにされていますが、今回の調査によって白山の蛇谷周辺のニホンザルでも同じ傾向があることを確認しました。

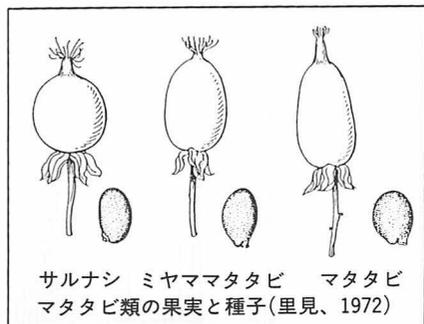
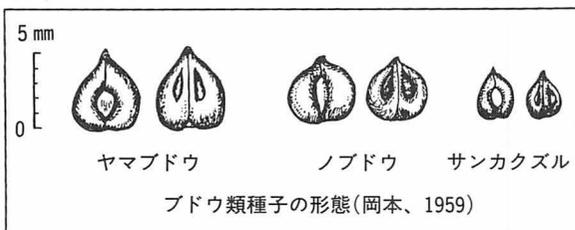


グミを採食するニホンザル（昭58. 9 吉野谷村中宮）

ヤマブドウやマタタビ、サルナシなどの果肉が厚く糖分の多い液果類は、脂肪の多いブナの種子と同じように、冬をむかえるニホンザルの食生活にとってきわめて大切な食物だと思われます。ブナが豊作の年には、ニホンザルはブナの実をむさぼるように食べますが、ブナの実は年によって豊作や凶作の変動があります（この1991年の秋は、ブナにほとんど実が付きませんでした）。一方、ブドウ類やマタタビ類は平均的に実をつけるため、このツル植物の生育状況が豪雪期をのりきるための秋のニホンザルの食物資源としてかなり貴重なものになっていると思われます。

(2) ニホンザルのブドウ類とマタタビ類の採食傾向

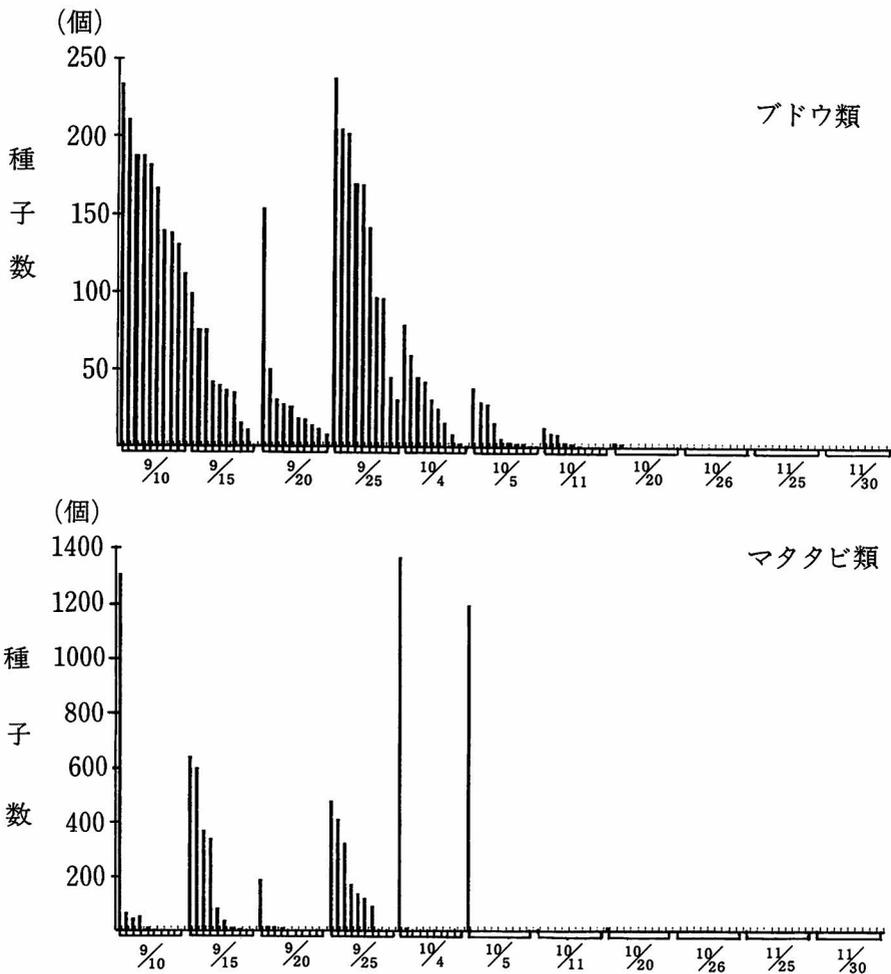
9月から11月までの3か月間のうち、9月は10、15、20、25日、10月は4、5、11、20、26日、11月は25、30日の計11日で、それぞれ10個ずつのフンの中のブドウ類とマタタビ類の種子の混入傾向をみてみました。その結果、ブドウ類は9月上旬から下旬に採食されている傾向が認められました。ブドウ類の種子が最もよく見られたのは、9月10日のフンで、フン10個当たり1,701個、ついで9月25日；1,405個、9月15日；442個、9月20日；370個でしたが、10月になりますと急に減少し、下旬にはほとんど見られなくなりました（図参照、P 4）。



ブドウ類果実1個には大体3個の種子が入っているので、9月10日のフンには約57個の果実の種子が入っていたことを示しています。

マタタビ類については、日により、フンによって混入のバラツキが大きく採食傾向ははっきり見られませんでした。たとえば、9月15日のフン10個の中に、合計2,096個(マタタビ類は1個の果実に約150個の種子が入っているので果実約13個分)の種子を数えることができましたが、1個当り645個や604個もの種子を含むものがある一方、15個や3個しか入っていないもの、まったく含まれていないものもあるというふうに、かなりのバラツキが認められました。このことは、他の日のフンでも同様でした(下図参照)。9月25日には、10個のフンの中に1,788個の種子をカウントしましたが、1個当り最大数484個のもの、最少数0個のもの、9月10日は総数1,530個の種子を数えましたが、1個のフンあたり最大数1,308個(果実約9個分)もの多数の種子を含むものがある一方、全く種子が含まれていないフンも見られました。これはブドウ科植物とマタタビ科植物の群落分布や生育個体数、果実生産数の多少やニホンザルの嗜好性の違いを示唆していると思われます。

日光の調査では、ブドウ類の出現頻度は10月から11月に高くなっており(50~100%)、マタタビ類については8月から11月に、30~40%の頻度で認められています。日光地方と白山の蛇谷とでは地形・地質、植生状況などが異なり、簡単に比較するわけにはいきませんが、これらのツル性の多肉果植物をニホンザルが大切な食物にしていることは共通していると思われます。



ニホンザルのフンに混入するブドウ類及びマタタビ類種子の傾向

森をつくる働きーニホンザルの種子散布とツル植物

秋のニホンザルの食生活のなかで主要な位置を占めるヤマブドウ、ノブドウ、サンカクズルなどのブドウ科植物やマタタビ、サルナシなどのマタタビ科植物は、いわゆるマント群落を構成する主要な植物とされています。

一方、白山・蛇谷は高茎草原が多いことで知られていますが、当地域のニホンザルの群れ数と高茎草原の分布の広さが関係しているのではないかと指摘されています。

実際、蛇谷ではブナやミズナラなどの広葉樹林と高茎草原との混合植生景観を各地で見ることができます。落葉広葉樹林と高茎草原との境界に分布する林縁植物がミヤマカワラハンノキやタニウツギ、クマイチゴなどの低木性の樹種とブドウ科植物やマタタビ科植物などのツル性植物なのです。蛇谷は急な傾斜地が多く、積雪期には雪崩の発生地も多いため森林の回復は容易ではありませんが、このような場所に分布している高茎草原地帯には必ず上にあげた樹種の芽生えや稚樹が見られるのです。

このマント群落を代表するツル植物は、露出した裸の地面を急速に被う役割を果たし、ブナ林やミズナラ林に風や日照が直接入りこむのを防ぎ、林内の乾燥を防止する働きがあるのです。

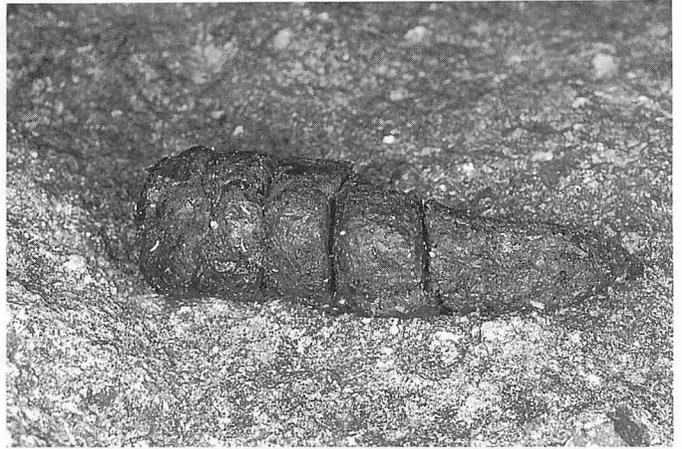
蛇谷に生息するニホンザルは、林縁に繁茂するヤマブドウやサルナシなどの甘い果実を食べながら、その種子をあちこちに散布してマント群落の形成に寄与し、森林の成立と維持、保存に貴重な役割があると思われるのです。

植物が分布を広げるためには、その種子を各地に分散させねばなりません。ブドウ類やマタタビ類はその甘い果肉をニホンザルに提供する代わりに、種子を遠くに運んでもらっているというわけです。

このような多肉果植物の種子散布については、植物と鳥類が相互進化してきた関係として早くから鳥類生態学の分野で注目されてきました。多肉果植物はその果実を多産化し、外果皮の色の鮮明化と芳香化、中果皮（果肉）の肥大化と美味化させ、鳥類が食べやすいように進化してきたと考えられているのです。

ニホンザルとブナ帯の植物種子の関係については、これまでに十分に論議されているとは言えませんが、鳥類と多肉果植物の関係と同じように、ニホンザルと植物にもこの相互進化の関係が当てはまると考えられます。

ニホンザルが森林生態系のなかで種子散布という大切な役割をもち、森をつくる一員となっている意義をもっと見直したいと思います。



ニホンザルのフン（平3、9、28、ジライ谷）
（このフンの中からブドウ類20個、グミ27個、マタタビ類14個など合計87個検出した。外形からは混入しているかどうか分らない。）

〈白山自然保護センター〉

白山麓における

トチモチ加工法の分布について

岩田憲二

はじめに

昨年10月、筆者は福井県大野市のK氏宅を訪れる機会を得ました。K氏は、九頭竜川支流の打波川流域に位置する上打波の嵐集落でオウレン（黄蓮）と赤カブの栽培を行なっていて、当初の訪問目的はこれら作物について聞き取り調査をすることでした。聞き取りの途中で「トチモチ」の製法に話題が移り、同じ白山周辺地域ではあっても、打波地方では石川県側（白峰村等）と異なる製造方法で造ってきたことを教えて頂きました。とりわけ、トチノミの強烈な苦味・渋味を除去し、食べられる状態にするための「アク抜き方法」が全く違うことがわかりました。

具体的には、打波地方ではアク抜きの際に加熱処理をしないのに対し、石川県側では鍋で実を煮て加熱する点が大きく異なります。筆者は、こうしたトチノミの加工方法の地域的差異を、石川・福井・岐阜三県の白山麓地域を対象に調査し、その成果を当センター発行の研究報告第18集(1991)に報告しました。ここでは、その要約を紹介します。なお、本文中のトチモチ製造工程は、主に昔から行なってきた伝統的な加工方法を対象としたもので、囲炉裏など現在ではほとんど使っていない生活用具も使うものとして、その手順を記載しました。

トチノミのアク抜き方法について

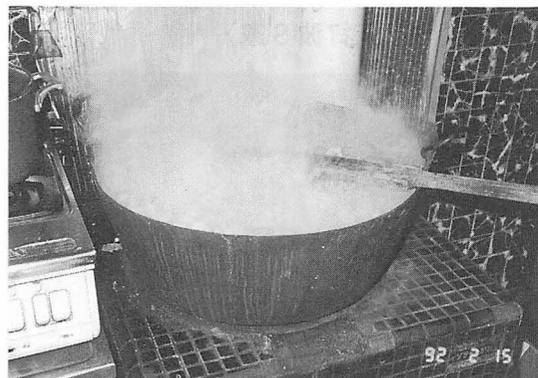
クリの実より一回り大きいトチノミには多量のデンプンが含まれ、また比較的簡単に採集できることもあって、全国各地のブナ帯近辺の山村で、正月用のモチや冬の保存食として利用されてきました。トチノミを食用とする際に問題となるのは、苦味・渋味の素となるサポニンやアロインといった有毒成分を取り除かなければならないことであり、こうした「アク抜き」には大変複雑な技術を要しました。

アク抜き作業に入る前の、『採集→水浸→乾燥・保存→皮剥き（温湯加熱含む）→水晒し（流水）』という各種工程は、地域によって著しい差があるわけではないので、ここでは省略します。その次の加工段階である、灰を使ってトチノミから有毒成分を除去する作業に焦点を絞って、加工法の分布状況の比較をします。アク抜きの際には灰を使用し、トチノミを加熱処理する工程は、地域によって有無があり、大まかに分けると3通りに分類できます。

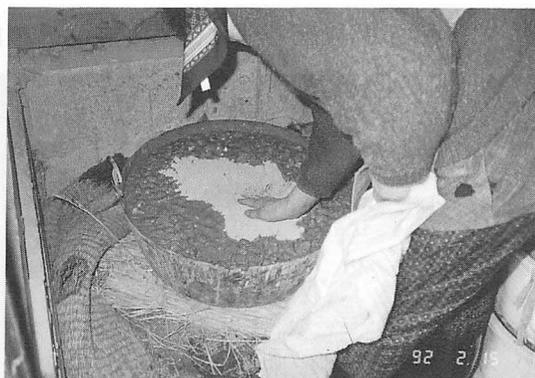
以下の3通りのアク抜き方法は、何れも上記の水晒しを終えた次の工程で行ないます。なお、「合わせる」とはトチノミに灰を加えてアク抜きをする作業のことで、「上手に合わせた」とか「うまく合わなかった」といいます。

①煮合わせ：石川県側の白山麓地域の大半は、「煮合わせ」の方法でアク抜きを行なってきました。文字通り、長時間鍋などで煮てから灰を加えてアク抜きを行ないます。まず、水晒しをしたトチノミを囲炉裏に掛けた鍋で水から煮ます。途中、水分が蒸発して無くならないように差し水をしながら、大体3～4時間煮ます。次に、鍋を火からおろし、手がつけられるかどうかくらいの温度に冷ましてから（約50℃）、灰を加えます。灰の量は家により異なりますが、煮合わせの方法ではトチノミ1升に対して約1升というのが平均的な分量です。灰と実と水分でドロドロになった状態でよく掻き混ぜてから、鍋の上部をワラで被い、その上から毛布や古布団をかぶせて保温して1～2日おきます。その後、きれいに水洗いしてから、モチゴメと一緒に蒸籠で蒸し、白について出来上りです。

煮合わせによるトチノミの加工（白峰村O家）



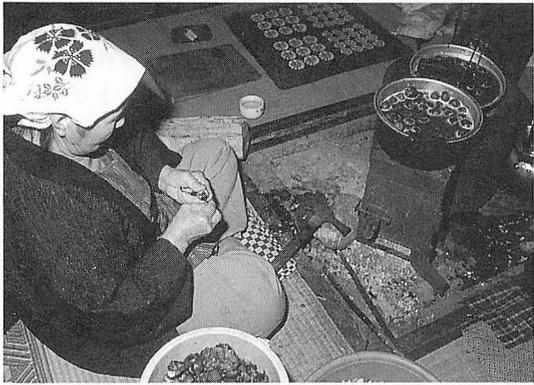
大鍋でトチノミを煮る



鍋に灰と実と水を入れ、ドロドロの状態

②**ビックリ合わせ**：煮合わせは鍋で長時間煮てから灰を加えるのに対し、ビックリ合わせでは、沸騰するほど熱い灰汁の中へ（水晒した）トチノミを直接入れます。一般に、灰の使用量は煮合わせよりも多く、トチノミ1升に対して5～7合を加えます。せいぜい10数分煮ただけで鍋からおろし、煮合わせと同様の作業（保温・水洗い・蒸す・モチ搗き）を行なって出来上りです。この方法は、短時間の内に温度・トチノミの量・灰の量を勘案し、直ちに灰を鍋に入れなければならないので、技術的には煮合わせよりも難しいとされています。灰の量を間違えると、実が溶けて無くなってしまったり、逆に堅くなりすぎてモチに搗けないことがあります。

ビックリ合わせによるトチノミの加工（白峰村B家）



ストーブのそばで皮を剥ぐ(昔はイロリ)



灰合わせ後のトチノミ

③**水晒し法**：前記2通りの加工法が、大なり小なり加熱処理の加工工程があるのに対し、この水晒し法では温かい灰汁につけるだけです。まず、皮を剥いで水に晒したトチノミを「サイツチ」で潰し、再び水に晒した後、布袋に入れて絞ります。これを予め作っておいた灰汁に数日つけて灰合わせは完了です。後は、前記の方法とだいたい同じです。灰汁の作り方は以下の通りです。まず、底に小さな穴をいくつもあけたバケツに布（木綿など）を敷き、灰を入れます。別の容器の上に格子状の網を横たわし、その上に先ほどのバケツをおき、灰の上から熱湯を注ぎます。バケツの底から灰の濾過液が下のバケツに溜り、その上澄み液を灰合わせ用に使います。

水晒し法によるトチノミの加工（大野市下打波S家）



木ツチで実を潰す



アク汁（灰汁）づくり

三つのアク抜き法の相互比較

以上の三通りのアク抜き方法は、白山周辺地域で何れも見られますが、その分布については比較的是っきりした特徴があります。加熱処理工程がある煮合わせ・ビックリ合わせは石川県と福井県（勝山）に分布し、加熱工程のない水晒し法は福井県（打波川以東）と岐阜県に分布しています。また、同じ加熱処理法でも、煮合わせとビックリ合わせではその分布に違いがあります。聞き取り調査によって作成した、これら三つのアク抜き方法の分布図を見ると、各方法毎の分布の特徴がよくわかります。

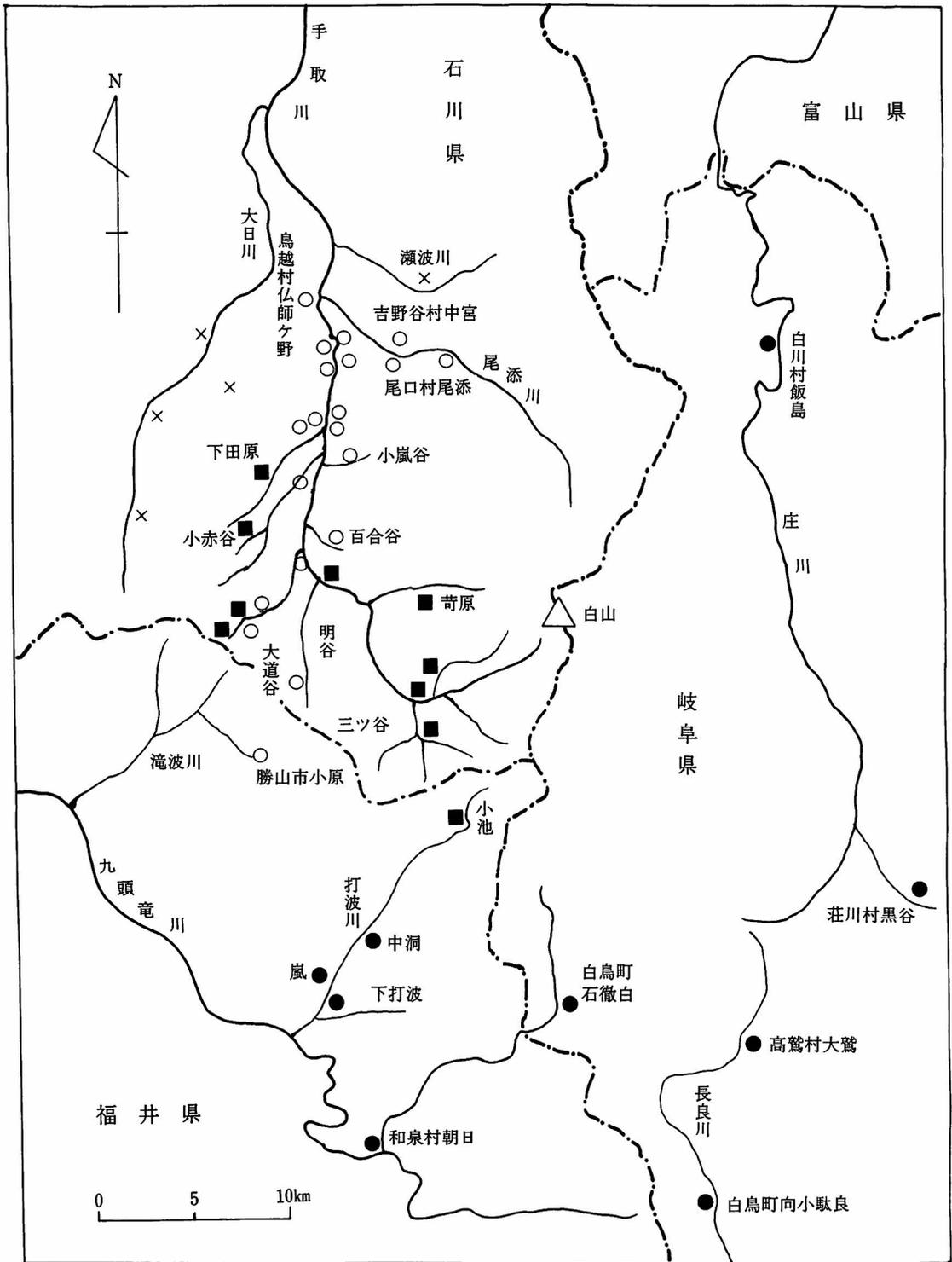
まず、加熱処理工程を有する二つの加工法の分布の違いですが、主として煮合わせは300m～500mの低標高地（定住集落）で、ビックリ合わせは700m～1,000mの高標高地（出作り地）で見られます。これ以外にも、両者の加工方法の違いはいくつかあって、例えばアク抜きに使う灰使用量・灰の原木・モチ搗きの量は明らかに違いがあります（表-1）。これらは無関係なようで、実はある程度の相関関係をもっています。高標高地にある出作り地では、冬の生活の中に占めるトチモチの必要性は低標高地（定住集落）よりも高く、必然的にモチ搗きの量は多くなります。そうすると、ビックリ合わせの方が技術的に難しくても、加工時間が少なく手間も燃料（薪）もかからず、灰の使用量も少なくて済むので都合がよいといえます。しかも、良質の灰の原木となるブナ・ミズナラは、高標高地の出作り地の方が入手し易い環境にあり、灰使用量を少なくする点からも都合がよいと考えられます。灰の入手や、灰合わせ後に水洗いして灰を落とす手間を考えれば、灰使用量は少ないにこしたことはないといえます。

これに対して低標高地（定住集落）では、非農林業従事者（商家・勤務者等）の居住や米作の存在など、出作り地とは条件が異なるので、冬の食料としてのトチモチに対する依存度は高標高地ほどは高くなかった。従って、トチモチ製造量は出作り地よりも少なくて

表-1 トチモチの製造例

	製造者	居住地（標高）	灰の量* / 灰の原料となる樹木	居住形態	トチモチ製造量**
ビックリ合わせ	K家	白峰村赤岩（830m）	4合/ブナ・ミズナラ 6合/他の落葉広葉樹	永住出作り	2.2臼
	H家	白峰村三ツ谷（800m）	5合/ブナ・ミズナラ	永住出作り	1.2臼
	O家	白峰村小赤谷（700m）	7合/ブナ・ミズナラ 1升/柴（雑木の薪）	永住出作り →季節	7臼
	B家	白峰村五十谷（840m）	7～8合/ブナ・ミズナラ	永住出作り	1.0臼
	N家	白峰村下田原（700m）	5合/ミズナラ・他の落葉広葉樹	季節出作り	1.0臼
	K家	白峰村市之瀬（900m）	5～6合/ブナ・ミズナラ	永住出作り	2.0臼
煮合わせ	G家	尾口村尾添（430m）	5合/ナラ・クリ 7合/スギ	定住集落	3臼
	S家	尾口村女原（320m）	1升/ナラ。ブナ だとそれ以上	定住集落	1～2臼
	H家	尾口村東二口（450m）	1升/特に材にはこだわらない	定住集落	3臼
	N家	白峰村桑島（440m）	1升/ブナ・ミズナラ	定住集落	5～6臼
	Y家	白峰村堂の森（590m）	1升/スギ2割・ナラ3割 その他雑種5割	永住出作り	5臼
	O家	白峰村太田谷（800m）	8合/ミズナラ 1升/スギ	季節出作り	1.0臼

*アク抜きするトチノミ1升当りの灰の量 **正月（2月1日）のために搗いた量。1臼=2升（一升=1.8ℓ）



白山周辺のトチモチ製造地分布図 ○：煮合わせ ●：水晒し法
 (原則として集落単位) ■：ピッキリ合わせ ×：加工法を確認できず

済むので、灰使用量が多い煮合わせの方法で造ってもそれほど差し支えないといえます。

以上の二つの灰合わせ法の特徴を、前記の項目を含めて表にまとめると次のようになりました(表-2)。同じ加熱処理工程を伴うアク抜き方法であっても、細かくみると極めて対照的な製造方法であることがわかります。

次に、加熱処理を伴う方法(煮合わせ・ビックリ合わせ)と、加熱しない水晒し法を比較してみます。前記の通り、水晒し法は白山周辺では福井県の打波地方以東及び岐阜県に分布しています。標高についていえば、調査対象地域内では福井県大野市下打波(330m)から岐阜県荘川村黒谷(880m)まで分布しています。従って、加熱処理の2方法と違って、低標高地と高標高地でアク抜きの方法が極端に異なるということはありません。

水晒し法では、皮剥きの段階で板を2枚合わせたトチ剥き器(ゴンジリ・ヨジリ・コロコロなどと呼ばれる)を使って、押し潰すように皮を剥きます。この結果、トチノミは小さい粒に砕けますが、これはできるだけ実を砕かないように気を配る煮合わせ・ビックリ合わせとは対照的です。加熱処理をしないで、温かい灰汁につけるだけの水晒し法では、トチノミの温度がそれほど上がらないので、実を細かく砕いても溶ける心配が少ないものと考えられます。また、水晒し法では加熱処理法と違って、トチノミ1升に対して灰をどのくらいというように、明確な量は定められておらず、灰の使用量に対する自由度は高いと考えられます。こうした特徴から、煮合わせ・ビックリ合わせの経験者は一様に、水晒し法の方が失敗が少ないのではないかと指摘しています。

表-2 煮合わせとビックリ合わせの製造法比較*

灰合わせ法	皮剥きの道具	加熱形態	主な分布地域	灰使用量	灰の原木	モチ搗きの量	加工時間・薪の量	トチの風味	技術的難易さ
煮合わせ	石の上ののせ、カナヅチで割る	長時間、実を水から煮る(3~4時間)	定住集落(標高300m~500m)	多い(トチ1升到灰1升)	ミズナラ・クヌギ等色々	少ない(5臼前後)	多くて手間がかかる。	普通	失敗は少ない
ビックリ合わせ	昔は、歯で割った。後にはカギ。	煮えた灰汁**に実を入れる。	出作り地(標高700m~1,000m)	少ない(トチ1升到灰5~7合)	ミズナラ・ブナ主体	多い(10臼以上)	比較的少なく済む。	強い風味・味は良い	難しい

*あくまでも一般的な傾向であり、項目によっては例外もある。
**灰汁を煮る時間は家によって違う。長いのは3~4時間煮る。

ま と め

昨秋、この調査を始めるきっかけとなったのは、環白山地域内で全く異なるアク抜き法が隣接してみられることに興味を持ったからです。前記のK氏宅がある打波川の流域では、最上流の小池集落を除いて水晒し法がみられました。小池は白峰の出作り地で、母村となった白峰村と同じビックリ合わせでトチモチが造られ、加熱処理法(煮合わせ・ビックリ合わせ)と非加熱処理の水晒し法の境界の一つとなっています。

今回の調査で、トチノミのアク抜き法を一つの指標とすれば、白山周辺地域内において、加熱処理文化圏と非加熱処理文化圏が隣接していることがわかりました。小池の例のように、白峰の出作り地であるという文化的背景が、トチノミのアク抜き法を規定する一つの要因となっていることもわかりました。また、加熱・非加熱を問わずトチモチの加工に関しては、トチノミ自体の分布、加工分布地の標高や植生、灰の原木(ブナ・ミズナラなど)の分布から、ブナ帯(冷温帯落葉広葉樹林)の文化であると考えられます。

〈白山自然保護センター〉

登山道の保護と復元

～白山高山帯を例として～

叶 岡 久 雄

南竜ヶ馬場の木道

登山道の荒廃

白山は、本県のシンボリック的存在であるばかりでなく、我が国有数の原始性に富む国立公園として高く評価され、極めて貴重な自然地域といえます。

白山には、山頂に向かって東西南北に登山道があり、それぞれが特徴を持っています。例えば、エコライン、展望歩道は眺望がきき、大変きれいなお花畑が見られ、登山者に親しまれています。

しかし、このような白山の優れた自然環境も、近年の登山利用に代表される種々のインパクトによって変容しつつあります。利用者の多い登山道では、登山者の踏み込みによる裸地化、さらには土壌侵食による拡幅や掘り込みの破壊が著しく、登山道は川原状となっており、現在もこの荒廃が進行しつつあります。また、この登山道が排水溝化することにより、この登山道周辺の植生に大きな変化をもたらすものと心配されているわけです。

そこで当センターは、この荒廃の進む登山道周辺の植生復元を図り、高山植物群落を保護するために、今何を実施しなければならないかを明確にするために検討委員会を設置し、具体的な手法を検討しました。委員会は、地元の有識者及び植生・土壌・地質の専門家からなるメンバーで別表のとおり組織しました。このほか富樫一次氏（石川県農業短期大学教授・昆虫）には必要に応じ、助言をいただきました。

検討委員会では、登山道の荒廃を軽減させ、植生の復元を図るため、現況を詳細に把握し、適切な評価を下すと共に、荒廃原因・問題点を明確にし、今後の登山道の利用、誘導・規制も含め広い範囲で復元対策を検討しました。

検 討 委 員

鮎野	義夫	(金沢大学名誉教授・地質・北陸地質研究所長)
清水	建美	(金沢大学理学部教授・植物)
藤原	正克	(白山比咩神社権宮司・白山観光協会事務局長)
古池	博	(金城高等学校教諭・植物)
永井	竹男	(自然公園指導員)
中江	実	(")
林	正一	(")

対 策

当センターでは白山高山帯の歩道と周辺の植生を保護するため、検討委員会の意見をふまえて以下の処置をしていきたいと考えています。

直接的には登山道の周辺植生に対する踏みつけという人為的作用を排除・抑制することが、植生を保護する最も有効な手段だと思われれます。この踏みつけを避けるには2つの方法が考えられます。第1は登山路の廃止または登山者数の制限です。第2は登山者に対する指導により、歩道利用の理解を求め、周辺植生への踏みつけを排除することです。これに加えて水の浸食作用を抑制する工事を行い、路面の整備と植生の復元を図りたいと考えています。平成3年8月～9月に実施した現地検討委員会では、南竜ヶ馬場と室堂を結ぶ展望歩道とエコラインについては早急に保護・保全が必要であると指摘されました。弥陀ヶ原、南竜ヶ馬場の湿性雪田植物群落の保存及び復元を図ること、また、そのために荒廃した歩道と周辺地域については土木工法を含めた人工復元を行い、弥陀ヶ原と南竜ヶ馬場の乾燥化した場所を以前の状態に近づけること等の意見が出されました。

また、歩道は歩きやすく、これ以上路面が侵食されないものとし、登山者に不快感を与えないようなものとする等、困難な要望も出されました。

なお、平成2～3年の2年間にわたって検討しましたこれらの問題については、「白山高山帯歩道の保護と復元検討会報告書」として3年度末に発行されました。平成4年度以降、木道・階段・排水の各整備工事を展望歩道(工事区間約1km)とエコライン(同900m)で行う予定です。

<白山自然保護センター>



水路化した登山道(弥陀ヶ原)



荒廃地を測量する



白山麓の巨木

(2)ブナ科の樹木

田 中 敏 之

伊野原神社のミズナラ
(尾口村鴉ヶ谷)

今回は、白山麓1町5村に分布するブナ科の巨木—アベマキ・ウラジログシ・クリ・コナラ・ナラガシワ・ブナ・ミズナラの7種—の分布を中心に紹介します。

白山で最も馴染み深いブナの林は、標高400~1,600メートルの間に広く分布しています。夏緑広葉樹林の代表樹種で、植物群落上からはブナーチシマザサ群落と呼ばれています。標準的な群落構造をみると、高木層にブナ、亜高木層にコハウチワカエデ、低木層にチシマザサ、草本層にホソバカンスゲが優占種となり、豊かな動物相となっています。このブナ林も薪炭林などで伐採されて再び成立した二次林と、奥地において昔から手つかずの原生林の二つに分けることができます。従って、巨木といわれるものは、原生林と何かの理由で残されてきた林の中に見出すことができますが、ブナの巨木を図示することは難しく、環境庁の調査でも特定されていないので、金沢ナカオ山岳会・林正一氏に貴重な調査データを提供して頂き、分布図作成の補完資料としました。

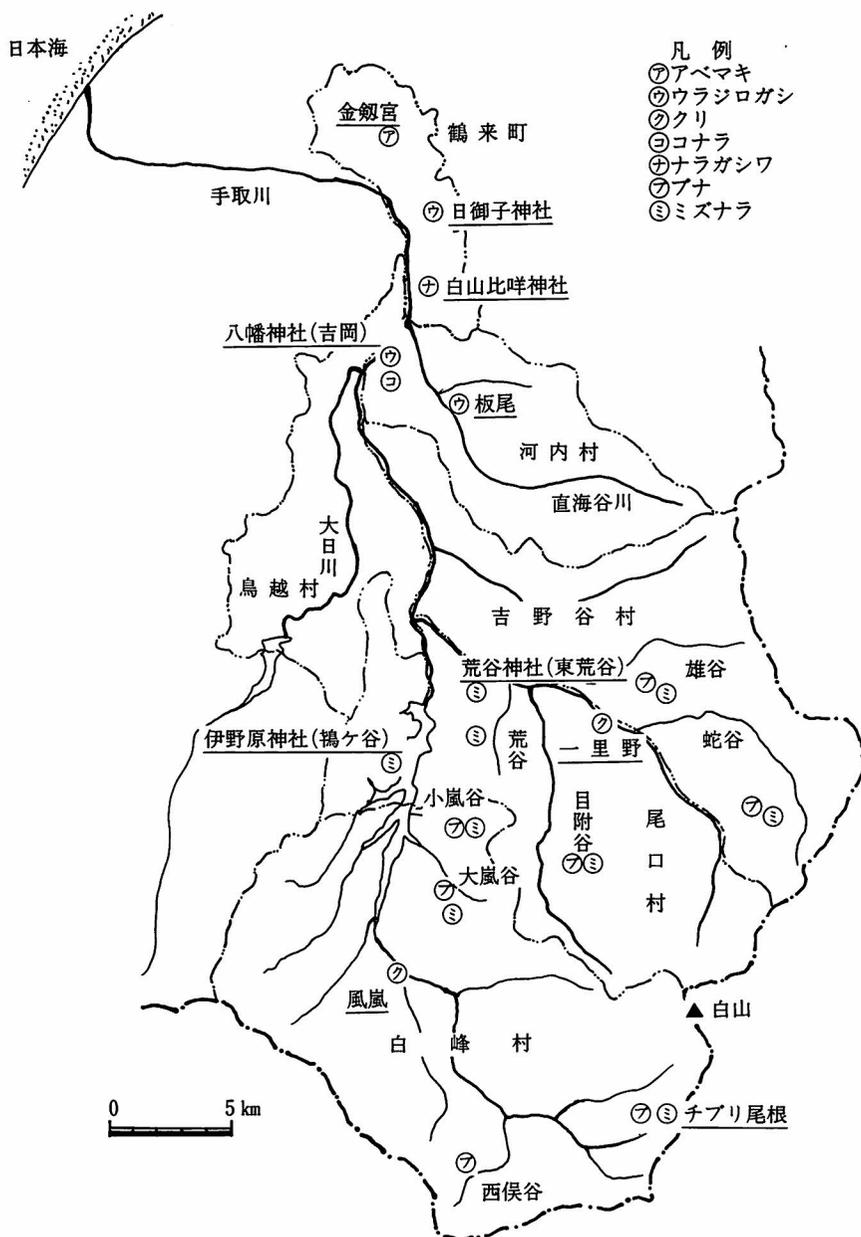
次に、ウラジログシについてみると、立派な県指定の天然記念物があります。それは金釵宮(鶴来町)の社叢で、ウラジログシ—ヒメアオキ群集の自然林です。そして、この森がブナ帯と照葉樹林帯の境い目となっているように見えます。クリの巨木は、尾口村一里野の国民宿舎のうしろに数本あります。

以上のブナ帯には、ブナ帯山村文化が息づいていました。ブナ材は鋏の柄、除雪用コシキ作り、ナラ材は鶴はしの柄作り等があり、金沢周辺や富山方面に移出していました。クリは、木羽・ヘギタとして屋根板に使用され、杉木羽と共に鶴来町、金沢周辺で大量に消費されたものと思われます。このため、中能登地方から、木羽・木挽き職人として夏の間、出稼ぎに来ていたことが郷土史に記されています。現在は、造林労働者として残っており、時代の変遷が見られます。

<日本技術士会会員>

白山麓の天然記念物指定の状況(ブナ科)

名 称	幹周 m	樹高 m	所 在 地	指 定 年 月 日
ウラジログシ林	4.9	20.0	鶴来町日詰町 金劔宮(0.5ha)	平.1.10.23(県)
板尾大榎	3.5	16.0	河内村板尾 坂上弘之氏宅	昭.43.5.1(村)



「巨樹・巨木調査報告書」環境庁(1991)、「石川県の巨樹」石川県林業試験場(1982)及び林正一氏の調査データより作成。

たより

白山麓では今年も雪が少なく、動物達にとっては比較的楽な冬だったと思います。野猿広場に来るカムリA群では、昨年春に生まれた0才児の子猿のほとんどは、厳しい冬を乗り切って、再び元気な姿を見せてくれました。

5月10日には、白峰村市ノ瀬に「国設白山鳥獣保護区管理センター」がオープンしました。この施設は環境庁が設置し、管理は石川県が行います。ここでは、白山に生息する野生生物の紹介と展示、自然観察の指導、各種情報提供などが行なわれます。毎年5月10日から11月5日まで開館し、この期間中は当センター職員が駐在しています。

6月は環境月間に指定されています。関連行事として、当センターでは6月5日(金)に一日所長を迎えました。一日所長は、カナダから北陸学院高校に留学中のコニー・イェーランさんが務め、書類の決裁や中官展示館の視察などを行いました。同じく、6月21日(日)には白峰村市ノ瀬で自然観察会を開催しました。

今年には白山国立公園が指定されてから満30年になり、これを記念して各種行事が開催される予定です。7月9日(木)と16日(木)の2日間、当センター職員が白山の動植物・地質・登山について話をする「白山の自然講座—お花畑と白山火山」が開催されます。7月23日(木)には、作家の加藤幸子氏と環境庁審議官の瀬田信哉氏を迎えて講演会が開かれます。自然講座、講演会とも会場は石川県立社会教育センター(金沢市本多町)です。どうぞご参加下さい。また、白山の自然を対象とした写真コンテストも行われます。皆様の素晴らしい写真をお待ちしています。締切は9月30日(水)です。各催し物についての問い合わせがありましたら、当センターまでお願いします。

白山の自然誌12「白山火山」が発刊されました。白山火山の生い立ち、山頂部の地質年代、過去の噴火活動など、白山火山に関する様々な調査成果を紹介しています。御希望の方は、175円切手を同封の上、当センターまでお申し込み下さい。

目 次

表紙 御前峰.....	東野外志男.....	1
—白山蛇谷の自然誌—ニホンザルのフンコロジー.....	林 哲.....	2
白山麓におけるトチモチ加工法の分布について.....	岩田 憲二.....	6
登山道の保護と復元～白山高山帯を例として～.....	叶田 久雄.....	12
白山麓の巨木(2)ブナ科の樹木.....	田中 敏之.....	14
たより.....		16

はくさん 第20巻 第1号(通巻83号)

発行日 1992年6月30日(年4回発行)
編集発行 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確文堂